
もどきども 第二話「vs.ろんずるウルフマン」

維川 千四号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もどきども 第二話「vs・ろんずるウルフマン」

【Nコード】

N6202L

【作者名】

維川 千四号

【あらすじ】

現代活劇ファンタジー“もどき”第二弾。今回の対戦相手は「狼男・ウルフマン」。しかし、狂気・凶暴のウルフマンが“ろんずる”とは、これ如何に。

***序* (前書き)**

現代活劇ファンタジー“もどき”第二弾。

次なる対戦相手は「狼男」。

ご興味のある方も、ない方も、読んで頂けたら感謝感激雨嵐です。

序

「……いいんだ。僕はこれでいいんだ」

そう言つて、彼はその場に崩れた。

「これなら、僕は誰も傷付けずに済む」

地面に倒れる直前、力なく笑つた。

「違う！ そんなの、絶対違う！」

………そんなの、ただの自己満足だ。

「はは。泣いているのかい、薄原くん？」

「そんなことはいいから、もう喋らないで！ なんて なんてこんなことになつてんだよ？」

これじゃまるで、あの映画の結末と同じじゃないか。

くそつ、オレはまた救えないのか？

また助けられないのか？

………。

………誰か、助けて。

誰でもいいから、誰か。

誰か、誰か、誰か………。

「早く助けに来いよ、ヴィアン！！」

天高く輝く月に、オレは狼の如く吠えた。

起

『人の噂も七十五日』なんて諺があるけど、このネット社会では『噂』はそこまでもたない。

次々と新しい情報が入り乱れ、人は常に新しい刺激を求めている。

だから、二年に超絶美少女がいる、とかいう『噂』もあつという間に廃れていった。

「『噂』も『伝説』も人々に伝えられ、想像されてこそ意味がある。そしてさらに願われることで初めて“僕ら”は生まれることが出来る」

そんなことを長々と以前、我が家の居候の吸血鬼“もどき”が語っていた。

だから、『噂』や『伝説』があるところには“彼ら”の存在があるかもしれないと、オレは考えるべきだった。

学校の屋上。昼休み。青空の下のベンチ。

「狼男？」

オレは結城真実が振ってきた話題をそのまま訊き返した。

「そう、狼男」

「こないだのつまんない映画じゃなくて？」

「うん。この辺で夜、何人も見た人がいるって話」

まあ、映画がつまらなかったのは認めるけど。

と、結城は苦笑した。

「単なる噂だろ。でかい犬と見間違えたとか」

「それが、しっかり二足歩行してたらしいよ。それにこれは『噂』じゃなくて『都市伝説』だから」

「いやいや。都市とか言えるようなとこじゃねえから、こじ」

「もー、素直じゃないな、智流くんは。津々浦町もようやく都市化

してきたっていう喜ばしいことじゃない」

「この海と山に囲まれた田舎町が？ つーか、山の中に洋館が建つてるとこなんか、絶対に都市じゃねえだろ？」

「ああ、大神おおがみさんの家のことね」

「あの家、大神っていつのか？ よく知ってるな、お前」

と、感心すると、結城は大きなため息を吐いて、こめかみを押さえる癖を見せた。

「ウチの生徒会長でしょ、大神さんは。ホントすっかりしてよね」

狼男だつてすっかり二足歩行してるっていつのに。

と、続けて小さく呟いた。

「ちよい待て。今、聞き捨てならねえセリフが聞こえたぞ」

「え？ そう？ 気のせいじゃない？」

「いや、気のせいじゃない。それに、オレだつてちゃんと二足歩行できるぞ」

そう言つて、オレは跳ねるようにベンチから立ち上がった。

「いやいや、そんなことを誇られても……」

私だつてできるし、と言いながら結城も立ち上がる。そして続けて、

「それじゃ、立ったついでに教室戻りますか。そろそろ昼休みも終わるし」

屋上の出入り口に向かって二足歩行を開始した。

だからオレもあくびをしながらも、すぐ後を追う。

「……眠てえ。次の授業、なんだっけ？」

「現国」

「うわ、魚住うしずみさんじゃん。寝れねえじゃん」

「……なんで授業中に寝ようとするかな、智流くんは？ だいたい、このあいだだつて」

と、お説教モードに突入したので、オレは遠くの景色を眺めることにした。

屋上の緑のフェンス越しに、洋館が見える。

小高い山の中腹に建つ、推理ドラマに出てきそうな、立派な洋館が。

今回の『狼男』との戦いの舞台が。

だけど、このときのオレはお約束通り、まだ何も知らない。

承

「あんだ、アイス食べたそうな顔してるわね」

晩飯の後、自分の部屋でダラダラとマンガを読んでいたオレはそう言われた。

突然ふすまを開け放って現れた姉・凜花りんかに。

「まったく、しょーがないわね。お金出してあげるから、買ってきなさい 私とみんなの分も」

そう言っつて、折った千円札を放り投げる我が姉。

「あんまり遅くならない内にさっさと行ってきなさいよ。あ、それと私はストロベリー系の氷っぽくないヤツね」

そう言っつて、開けたときと同じ速さでふすまを閉めた我が姉。

と以上が、つい先ほど姉弟間で行われた（オレは無言）やりとりである。

で、オレは今、買い物を終えてコンビニを出た。

ちなみにコンビニの正式名称『コンビニエンスストア』の『コンビニエンス』とは『便利』という意味、らしい。

けどウチの場合、『便利』とはとても言えない。

チャリで十分掛かるのは、絶対『便利』じゃない。

しかも、近所のスーパーはこの時間には閉まってるし。

……まったく、これだから田舎は。

だから昼間の狼男の話も、絶対に都市伝説なんかじゃねえ。

田舎町伝説だ。

つーか、狼男って古くね？

吸血鬼並みに廃れた伝説じゃね？

今どき、小学生でも信じねえっての。

そう思いながら、チャリのスピードを一度落とす、道を曲がった

ときだった。

その『噂』の『伝説』に出会ったのは。

オレは驚きのあまり、チャリを完全停止させた。

美しい銀の毛並み。鋭く尖った爪。ピンと立った耳。

この道の数少ない街灯に照らされたその姿は、確かに『狼男』だった。

ただし、二足歩行ではなく、その場にうずくまっていた。

そして、紳士的にも、ちゃんと黒っぽい服を着て、靴も履いていた。

「ウウウウウウ……」

低い唸り声が辺りに響く。

犬特有の唸り声。だけど、威嚇の声のようにには聞こえない。

もっと弱々しい声。これは 苦しんでる？

そして唸ったまま、こつちに背を向けた体勢で動かない狼男。

……………。

……普通、走って逃げるとこだよなあ、コレ。

だけど、もう完全に普通じゃないんだよなあ、オレ。

だから、親切なオレはチャリに乗ったまま、

「あの一、大丈夫ですか？」

と、慎重に声を掛けてみた。

途端、狼男は顔だけ振り向いた。

青く光る目。獐猛な牙。

それはまさしく、服を着た狼だった。

ただし、そこら辺の服を着せられた犬とは、格段に印象が違う。

頭で考えるまでもなく、本能的に恐ろしい顔立ちだった。

そして次の瞬間、狼男の姿は街灯の下から消えていた。

コンクリートをその二本の脚で強く蹴り上げ、大きな身体で軽々と民家を飛び越すと、そのまま狼男は夜の闇に消えていった。

「マジかよ、田舎町伝説」

一人残されたオレは狼男が消えた空を見上げ、そう呟いた。
月が綺麗な、雲一つない夜空だった。

承・続

「ウルフマン」

例によって例の如く、ヴィアンは開口一番そう言った。そしてさらに、

「何度も言うようだけど、僕は専門家じゃないから正確な情報じゃないかもしれないけど、それは承知していてね」

と、お約束の前置きを続けた。

「ウエアウルフやワーウルフ、ヴァラヴォルフやルーガルなんてのが呼び名としては正しいけど、この国で一番分かりやすいのはウルフマン。つまり狼男。なんのひねりもない、そのまんまの名前だよね」

って僕も他人のこと言えないか、と吸血鬼“もどき”は笑った。

「で、狼男の特徴とか特性は？」

「強靱な肉体に鋭い爪と牙。さらにパワーとスピードを兼ね備えた戦闘特化型。まともにもやり合えばまず勝ち目はないね」

「なんだよ、そのステータス。強過ぎじゃねえか」

「強過ぎ、か。なるほど。チルチルくんも、たまにはいいこと言うねえ」

「『たまには』は余計だ。殺すぞ」

「“殺せる”ものなら是非」

と、ニッコリ笑うヴィアン。なので、

「……で、強過ぎがどうした？」

とりあえず無視の方向。

「……最近チルチルくん、つれないねえ。恋人ができたからって、今までの人間関係をないがしろにするのは良くないよ。僕の経験上」「うるせえ、黙れ、飼い殺すぞ」

「しばらく生かされるの!？」

「首輪でつないで、毎日ギョウザとペロンチーノをエサにしてやる」

「ひどい! ニンニク責めなんて! 次の日まで臭いが残ったらどうするんだい!？」

「それが嫌なら、さっさと続きを話せ」

「やれやれ、と肩をすくめてからヴィアンは続ける。

「狼はね、犬と違って飼い慣らせないんだよ。人間の首輪程度じゃ、その強過ぎる力を制御できないんだ。だからウルフマンも同じく、力に振り回されて暴走する。そしてそれがウルフマンの弱点さ。理性のない獣なんて、人間が用意周到に仕掛けた罠には敵わないからね。ただ……」

「ここで、いつも無駄に饒舌なヴィアンが黙り、考え込む素振りを見せる。

「ただ、なんだ?」

「学校で流行ってる『噂』ってのは、しばらく前からあるんだろう?」

「ああ。結城の話だと二週間くらい前から目撃されてるらしい」

「そうか。それはやっぱり変だね」

「変? 何がだ?」

「ウルフマンはその特性上、見境なく人を襲うんだ。だけどそんな物騒な話は全く聞かない」

「まあ、確かに。そんな事件、この田舎町ならあつという間に広がるしな」

「でも、チルチルくんが見たウルフマンは完全に表面化してる。なのに、暴走はしていない」

「ああ。見た目は完璧に狼だったけど、オレを見たら逃げ出したくらいだしな」

「まだ鮮明な記憶の中の狼男の青い目。それは今思えば、恐怖で怯える目だったような気がする。」

「うーん……もしかしたらチルチルくんのドツミチルクンペルゲンガーみたい
に制御できてるのか、それともこのあいだの真実まみちゃんのサキユバ
スみたいに抑制してるだけか……まあ、なににせよ被害が出る前に
早めに解決するに越したことはないね」

「了解。明日学校で詳しく話を聞いてみるわ」

「うん、よろしく。僕も頑張つて日中から、外で情報収集してみる
よ」

と、言うてから、一度大きさに咳払いをしてヴィアンは続けた。

「ところで、僕のアイスは？」

* 承・追 *

「はじめまして。薄原くん、だよね？」

それが津々浦第二高校生徒会長・大神征志郎との初対面の第一声だった。

午前の授業が終わり、今日も天気が良いので屋上で昼飯を食べようと結城に誘われ、席を立ったときだった。

三年生が急に躊躇いなく二年のオレの教室に入ってきて、オレの目の前に立ちはだかった。

「そう、ですけど……」

「うん。やっぱり二年生のことは二年生に訊くのが一番だな」

そう感心するように言うと、大神さんは後ろを振り向き、軽く手を振った。

すると、キヤー、と甲高い歓声。教室の外でこっちを見ているクラス的女子三名が喜んで手を振り返していた。

スポーツ選手みたいな体型に、イケメン俳優みたいな顔立ち。さらに性格も良さそうなら、女子ウケ抜群だろう。

それに何より、ヴィアンほどじゃないが背が高い。

……ちなみに言っとくが、オレが小さいわけではない。

「あ、失礼。自己紹介がまだだったね。僕は、生徒会長をやらせてもらっている大神征志郎。好きな食べ物は筑前煮だ」

「……オレは薄原智流。嫌いな食べ物はピーマンです」

「む、それは駄目だ、薄原くん！ 好き嫌いはいけないぞ！」

「……はあ」

……。

……オレ、この人、嫌い、かも。

「ピーマンには各種ビタミンが豊富に含まれ、それらは身体の成長

に欠かせないものだ。つまりピーマンを食べないと大きくなれないと言っても過言ではない」

「え？ マジですか？ ピーマン食べれば大きくなれるンすか!？」

「……、……まあ、そんな些細なことはさておき、本題に戻ろうか」
いや、オレにとつてはものすごく重要な話ですから！

と、ツッコミたかったが先輩相手なんで遠慮した。

「今、時間いいだろうか？ できれば生徒会室まで来てほしいんだが」

そう言われたので、オレは結城を見た。すると、

「いいよ、先に屋上で待つてる」

と、許可が出たので、

「分かりました。行きましょう」

素直にうなずいた。

実はオレにも、大神さんに訊きたいことがあったし。

舞台移動。

鍵を掛けた生徒会室。向かい合う二人。

「昨日は驚かせてすまない、と言ったら、なんのことが分かるかい？」

大神さんのその言葉で、オレの予感確信に変わった。

「分かります、と言ったら、どうしますか？」

オレがそう訊き返すと、ニッコリと笑って、

「助けてくれ、と頼むかな」

大神さんは平然と泣き言を吐き出した。

「薄原くんは昨日、あの姿の僕に『大丈夫ですか？』と訊いてくれたね。そんなことを言ってくれる人、初めてだったから僕も驚いてしまつて、つい逃げ出してしまつた」

それに、と続ける。

「そんなことを言ってくれる人を傷付けてしまつんじゃないかと思うと、怖くて仕方なくてね」

まったく情けない限りで申し訳ない、と高い位置にある頭を軽く下げた。

背の高さ。黒っぽい服は学ラン。

そして一瞬だけ見えた、怯える青い目。

この人が間違いなく、あの『狼男』だ。

「ついこのあいだ奇妙な噂を聞いて、色々と僕なりに調べてみたら薄原くんが関わっているらしいと分かり、さらに君は夢守神社ゆめもりの息子さんだと聞いたんだ」

やっぱり二年生のことは二年生に訊くのが一番だね。

と、今は至って普通の黒い目でオレを見据えて、話を続ける。

「もしかして夢守神社は『そういつたもの』を被うことができる神社なのかい？」

「いや、ウチはそういうヤツじゃないですけど、オレの知り合いに専門家“もどき”がいます」

「では、噂の『清楚なのに色気があって、だけど儂げで守ってあげたくなる超絶美少女』の件もその人が？」

「……まあ、一応」

……噂、怖え。

尾ヒレも背ビレも胸ビレも付いてる。

「お願いだ、薄原くん。僕にその人を紹介してもらえないか？ できる限りの謝礼は払うつもりだ。もちろん君にも」

「いやいやいや、そんなモンもらえませんよ。それに、オレたちもちょうど大神さんを捜してたところなんで」

「僕を、捜してた？」

「昨日、あの姿の大神さんの話をその知り合いにしたんですよ。そしたら、早く見つけて解決した方がイイって言ってたんで」

「そう、なのか。早い方が良いと……」

そう言っつて、大神さんは少し考え込み始めた。

「どうかしましたか？」

「あ、いや。それなら急で悪いんだが今晚、我が家に来てくれない

か？ 詳しい話はそこでしたい。時間などは放課後にまた教室に伺うのでそのときに」

「……分かりました。オレも後で知り合いに連絡しときます」

「すまないね、薄原くん。そして、ありがとう」

「いえ、オレたちも目的があってやってるんで気にしないでください」

「そうか。では、早く戻ろうか。君を屋上で待ってる人にも悪いしね」

そう言つて、大神さんは生徒会室の鍵を開け、オレに対してドアを開けてくれた。

オレもちゃんと会釈をしてから廊下に出て、そこで大事なことを思い出した。

「あ、そういえば、事情が事情なんで人払いをお願いしたいんですが、大丈夫ですか？」

「ああ、それなら問題ない」
オレの後を追って大神さんも廊下に出て、なんの悪意もない爽やかな顔で続けて言った。

「今夜は両親ともいないから、僕一人なんだ」

後日、このセリフを聞いていた女子数名によって学校中（主に女子）に広がる『二年男子と生徒会長のB.L.的な展開』という、噂の真の恐怖を、このときのオレはまだ知る由もない。

承・更

そこそこの長さで高さの坂を上りきると、大神さんおおがみの屋敷はあった。

話によると、山そのものが大神家の土地らしい。

だから、大神さんの家に来ることどころか、この山に入ることすら初めてだった。

……近くで見ると、ますます立派な洋館だな。

一目で歴史があるのが分かるが、それなのに手入れが行き届いている。

さすがは名家、ってところか。

とりあえずインターホン（ウチのとは違ってカメラ付き）のボタンを押す。

日がもうすぐ暮れる頃。だいたい約束の時間。

あの後、放課後になるとすぐに大神さんが教室に来て、

「すまないが、生徒会の仕事はまだ残っていてね。夜になる前には帰れると思うから、その頃に我が家を訪ねてくれないか？」

と言って、オレと別れた。

だからオレは学校から病院に寄り、面会時間ギリギリまで病院で過ごし、そのまま直接ここに来た。

一度家に帰ることも考えたが、方向が真逆になり面倒くさいのでやめた。

なんて、時系列の脳内整理をしていると、

「お待たせしたね、薄原うすはらくん」

インターホンから声がした。そして続けて、

「あれ？ お知り合いの方は一緒じゃないのかい？」

と、これからの展開にとって極めて重要な疑問を口にした。

「あ、大丈夫です。ちょっと遅れて来ると思うんで」

「……そうか。ではすまないが、鍵は開いているので入ってきてくれないか」

「分かりました」

そしてインターホンが切れる音がした。

だからオレは言われた通りに、

「……おじゃましてまーす……」

一応小さく挨拶しながら、鍵の開いている大きな扉を開けた。

室内も、外観と同じく立派な洋館だった。

……なんか、ゲームに出てくる屋敷みたいだな。昔やったホラー系のアクションゲームの。

そんな感想を抱きつつ、とりあえずそのままエントランスホールで大神さんを待つことにした。

……

結局、放課後に大神さんと約束した後に家に電話してみたが、ヴィアンは不在だった。なので電話に出た母に、帰ってきたらここに来るように、と伝言を頼んだ。

で、今に至る。

が、今ここにヴィアンの姿はない。

多分、まだ『狼男』を捜してるんだろう。

こんな晴れた日に、日焼け嫌いのアイツがよく日中から活動してるな。

よほど腹が減ってるんだろうか？

いや、このあいだサキュバスを食ったばかりだし、それはないな。

つか、本人に訊けば一番早い。

なのに、本人がここにいない。

……

やっぱり首輪代わりに、アイツにケータイくらい持たせたいな。だけど、学生のオレには金銭的に厳しいしなあ。

なんて考えていると、

「ようこそ、薄原くん」

と、前方の大きな階段から声がした。

なのでオレは、階段を下りてくる彼を見た。

しっかりと二足歩行で、ちゃんと一段一段下りてくる彼を。

学校とは違って学ランではなかったが、彼は間違いなく大神さんだった。

確かに服装は『昨日』と違うが、その姿は間違いなく大神さんだった。

目の前にいる『狼男』は。

「昨日に続いてこんな姿ですまないね。今日は何故かいつもより変身が早かったんだ」

本当に今日は早めに帰ってきて良かった。

と、階段を下りきり、獰猛な牙を見せながら笑う大神さん。

……………。

……………うわ、改めて見るとリアルに怖え。

昨日と違って明るい室内だし、さらに真正面で向かい合ってるし。と、少しビビっているオレに

「まあ、とりあえず早めの夕食でもどうだい？ お手伝いさんが用意してくれたものがあるんだ」

と、極めて紳士的に誘う狼男。

「……………それじゃ、いただきます」

「そうか。では、ダイニングに案内しよう」

そう言って別室の扉へと歩き出す大神さん。

オレもその後が続く。

……………。

……………狼男の夕食は実はオレでした、ってオチじゃないよな？

まあ、見た目はアレだけど、それ以外は昼間と変わらないし大丈夫だよな。

……………大丈夫、だよな？

……………。

「あ、あの。そういえば、食事中でもイイんで詳しい話、聞かせて

もらっていいですか？」

ちようど大神さんがドアノブに手を掛けたとき、オレはそう声を掛けた。

すると頭だけ振り向き、大神さんはその青い目でこっちを見た。

「む……僕は構わないけど、知り合いの方を待たなくて良いのかい？」

「いや、待たなくてというより、待たない方がイイです。話し相手としては、かなり面倒くさいヤツなんで」

「そう、なのか。だけどお願いする側として、それでは失礼になる気がするんだが……」

「ああ、大丈夫です。後でオレから説明しとくんで。それに、オレなりの対応策も考えたいんで」

「対応策？ やっぱり君も『そういったもの』の専門家なのかい？」

「いやいや、専門家なんて言えるようなレベルじゃないですよ。オレなんて、まだまだホントになんにもできません。ただ、自分の経験値を上げておきたいんですよ」

そして大神さんの青い目をまっすぐ見据えて、オレは言う。

まるで自分に言い聞かせるように。

誓いの『宣言』のように。

「たとえオレ一人でも、絶対に倒さなきゃいけない相手がいるんで」

* 転 *

おおがみ
大神貿易商社。

この国が文明開化し始めた頃、僕の曾祖父が立ち上げ、祖父、父と継いできた会社だ。

そして僕も、いずれ継ぐことになる。

だから、上に立つ者とはこうあるべきだと、出来うる限りの教育を受けてきた。

なんの疑問も抱くことはなかった。

僕はそうあるべき人間なんだと思っていた　中学に入る頃までは。

みんなが楽しく遊んでいる頃、僕は経営学を学んでいた　いや、学ばされていた。

別に勉強自体は嫌いじゃなかったし、将来的に会社を継げることも誇りだった。

だけど、ただ普通に僕もみんなと遊びたかった。遊んでみたかった。

毎日毎日、そんな風に思っていた。

そして、高校受験で僕は初めて両親に反抗した。

家庭教師の先生に勧められていた隣の進学校でなく、津々浦第

二高校を受験したいと言った。

今思えば、実に単純で幼稚な発想だ。

決められたレールから脱出してみたい。逆らうことで自分らしくありたい。

そんなことを考えていた。

だけど両親の反応は、僕の予想とはまるで違った。

『後学の為には是非そうすると良い』

僕が今も覚えているのは、その一言しかない。

でも、その一言で十分だった。ちつぽけな自我を諦めるには。もちろん両親は僕の為を思い、そして僕のことを尊重してくれた言葉だ。そこに悪意があったとは決して思えないし、有り得ないと思う。

なのに僕が欲しかった言葉は、そんなものではなかった。

反抗した僕を、真つ向から否定してほしかった。

本当に今思えば、実に単純で幼稚な発想だ。青臭い、の一言に尽きる。

だから、僕は諦めた。

両親の望むような人間になろうと思った。その為の努力もしたつもりだった。

そして一ヶ月程前の夜、それは起こった。

突然、僕は『人間』ではなくなった。

得体の知れない衝動に駆られ、小一時間程ベッドの上でのたうち回り、気付くと『狼』になっていた。

翌晩も、また翌晩も、そのまた翌晩も。

その日から毎晩、僕はこの姿になった。その度に本能のような衝動を抑え込んだ。

もちろん、医師に診せることも考えた。だけど素人考えでも、これはそんなことで解決出来ることは思えなかったし、それに何よりに人に会いたくなかった。衝動が抑えきれなくなる気がした。

そして数日後、僕はやっと気付いた。

これは、諦めた。いや、諦めた振りをしたあの時の自我なんだと。この姿は、好きなように生きてみたい、という僕の本心なんだと。

ちょうどその頃、両親は長期で海外にいたし、変身も夜だけだったから独りで我慢しようと思った。

だけど日に日に変身する時間は早くなっていった。

二週間程前からは、帰宅途中に変身して人に目撃されることもあった。そしてその度、自分が危害を加えないように　狼の衝動が

抑えきれなくならないように、全力で逃げた。

そして昨日、ついに僕は君に出会った。

「大丈夫ですか？」と、こんな姿の僕に声を掛けてくれた。

もしかすると君なら救ってくれるんじゃないか、そんな予感がした。

そして今日、予感はず信に変わった。

だから一人の男として、一匹の狼として、今一度お願いする。

僕を　助けてほしい。

* 転・続 *

「病は気から」

大神さんおおがみの話聞き終わると、オレはヴィアンよろしく開口一番にそう言った。

「知り合いの専門家“もどき”が言うにはこういう症状は『そういうモノ』らしいんです。日頃そういう風に思ってるから『そういうモノ』に取り憑かれ じゃなくて、宿るんですよ。オレたちみたいに」

「オレたち？ もしかして薄原くんも……」

「ええ、そうです。オレにも『そういうモノ』が宿っています」

「……宿っています、ということは完治していかないのかい？」

「完治、っていうのが正しいのか分からないですけど、まあそういう感じですよ。一応の妥協点で落ち着いています」

すると大神さんの表情が曇り、

「もしかして、僕も元にはもう戻れないのだろうか？」

と、独り言のように不安を口にした。

「いや、大神さんは大丈夫です。オレの場合は自業自得っつーか、望んで妥協したんで。それに専門家“もどき”は『狼男』は簡単に解放できるって言ってたんで安心してください」

「そう……か。簡単、なのか。いや、そうだな、すまない。情けないことを言っつて、君に気を遣わせしまった。どうか忘れてほしい。む、薄原くん、カップが空じゃないか。ちょっと待っていてくれ、すぐに次の紅茶を淹れてこよう」

と、鋭い爪の生えた狼の大きな手で優しくティーポットを掴むと、大神さんは豪華なダイニングテーブルを離れ、素早く隣の部屋へと消えていった。

オレは慌てて席を立ち、音のした部屋へと　　大神さんのいる部屋へと向かった。

そこは広々としたキッチンだった。

この洋館には少し不釣り合いな最新型の調理機器が並び、床にはティーポットの破片が散乱していた。

そしてその破片の中心に、大神さんは立っていた。

こっちに背を向け、窓の外をただ茫然と見ながら。

「……あの、大丈夫ですか？」

初めて今の姿の大神さんと出会ったときのように、オレは慎重に声を掛けた。

普通なら別に慎重になる場面でもないが、慎重になる理由が一つだけあった。

大神さんの纏う雰囲気が違う。

別に何が、というわけではない。言葉で説明しろ、と言われても無理だ。

だけど何かが、明確にさっきまでと違う。多分、オレの本能的な何かがそう感じている。

そして初めて出会ったときと同じく、大神さんもゆっくりと頭だけ振り向いた。

その青い目で、オレを見た　　いや、射抜いた。

見る者全てに恐怖を与えるような鋭い眼光。

それは　　理性のない獣の目だった。

「……く、る……な……」

獐猛な牙の隙間から、辛うじてそんな大神さんの苦しそうな声が聞こえた次の瞬間、窓ガラスを突き破って『狼男』は外へ飛び出していった。

「　　っ、大神さん！」

急いで風通しの良くなった窓から外を見る。

しかしそこに狼男の姿は、もうない。

見えるのは、屋敷の明かりで照らし出された大神家の山の木々。

そして、暗い空に輝く丸々と満ち満ちた月だけだった。

* 結 *

とびきり素直なオレは、ここで反省をしようと思う。

失敗は三つ。

一つ目は、狼男がおとなしいと油断したこと。一度家に帰り、ヴィアンを連れてここに来るべきだった。

二つ目は、大神さんおおがみを不安にさせないことには成功したが、逆に無意味に安心させたこと。それで気を緩んで、今まで抑え込んでいた狼男の力を解放させてしまった。

そして三つ目は、今日が満月だと気付かなかったこと。さつき窓の外の景色を　空に輝く月を、大神さんは見てしまった。

もし大神さんが『狼男』のイメージに忠実に願ったなら、満月の夜は狼男の強過ぎる力が最も強くなるはずだ。

だからこそ、こんな時間までヴィアンは懸命に狼男を探してるんだ。早めに手を打つ必要があると言ってたのは、こういうことだったんだ。

「くそ、どこ行った？」

木々が乱立する大神家の山を、オレは目的地もなく駆ける。

いや、正確には目的地はある。狼男のところだ。

だけどその狼男を、完全に見失っている。

『ウルフマンはその特性上、見境なく人を襲うんだ』

昨日のヴィアンのその言葉が、考えたくもない最悪の結末を想像させる。

なんとしても、町に行かせるわけにはいかねえ。無人のこの山から、出すわけにはいかねえ。

ここで、オレが、食い止める。

だから夜の闇の中、狼男を捜す。

街灯などもちろんない山の中。いくら満月の夜だからって、暗く

ないわけがない　普通の人間には。

オレには春休みにもらった吸血鬼“もどき”の血が、まだ身体の半分くらい流れている。だから今日の月明かりは、いっそも明る過ぎるくらいだ。

……そうだ。まだ半分くらい残ってる。

多少の傷なら、問題ないレベルだ。常人の数倍　いや、数万倍の速度で回復できる。

『まあ、とはいえ所詮はウルフマン“もどき”だからね。現実世界こちやがわの肉体がベースである以上、身体能力もそれに付随するレベル。いわゆる『火事場の馬鹿力』ってヤツさ。たかがリミッターを外した程度じゃ、今のチルチルくんでも致命傷を負うことはまずないだろ』
『う』

と、腕ひしぎを掛けた後のヴィアンの補足説明を思い出した。

……………。

そうだ。アイツが来る前に、オレ一人で狼男を捕まえよう。

オレ一人でも大丈夫だと、見せつけてやろう。

そう決意したちようどそのとき、狼の遠吠えが辺りに響いた。

場所は、そう遠くない。

オレはスピードを落とさず方向転換をして、目的地を目指した。

“まだ”半分と“もう”半分。そんな語り尽くされた精神論を、甘つちよろい考えのオレはすぐさま身をもって知ることとなる。

* 結・続 *

ミシミシと軋んだ音を立てて、目の前の一本の木が傾いていく。徐々に加速して地面に近づく木の隣、しっかりと二本の足で狼男は立っていた。

「おおがみ大神、さん？」

無意識に、オレは彼の名前を口にした。

途端、狼男の青い目が光った。

それは 獲物を見つけた獣の目だった。

次の瞬間、大きな音を轟かせて木が完全に倒れた。

そしてそのとき、狼男の姿は“そこ”にはなかった。

狼男は“ここ”にいた。

獰猛な牙を見せつけるように大きく口を開き、オレの喉笛を噛み砕こうとしていた。

「うおうりやあああ！！」

だけどそんなことを理解できたのは、オレの影からミチルが足の方から現れ、狼男の頬をオーバーヘッドキックの体勢で蹴り飛ばした後だった。

「何、ポーっとしてんの！？ 死んじやうとこだったじゃない！」
くるりと目の前に降り立つと、珍しくミチルが怒鳴った。

「……は、春休みに殺そうとしてきたヤツに言われたくねえよ」

一応そう反論してみるが、声の震えは止められなかった。完全に気が動転していた。

何が、起きた？

狼男の姿が、見えなかった。

気付いたときには、もう目の前にいた。

「グウウウウウ……」

ミチルの蹴りの勢いで遠くの木まで打ち付けられていた狼男は体

勢を立て直し、オレたちを鋭い眼光で睨み付けながら唸っている。それは初めて会ったときの苦しんでいるものではなく、明らかな敵意のある威嚇の唸り声。

「……完全にノーダメージって感じだな」

目の前の敵から視線を外さず、オレはポケットから『無太刀』を取り出す。

「そつみただね。ボクは首をへし折るつもり満々だったんだけどなあ」

と、オレの影は拗ねた顔で相変わらずの怖いことをさらりと言った。

「大神さん いや、狼男」

『無太刀』を抜き、その柄の先にある、相手には見えないだろう刃を向け、

「オレはあんたを斬る」

オレは“宣言”を口にした。

途端、『言乃刃』が月明かりを浴びて地面に影を落とした。

直後、刃に一切怯むことなく狼男はまっすぐこっちに向かって駆け出した。

前へ前へと跳ねるように、一步一步地面を抉りながら。

迅いっ！

だが、集中していれば見えないレベルじゃない。それに何より、動きが直線的だ。

オレは素早く『言乃刃』を峰へと持ち替える。

斬る、とは言ったが本気で斬るわけにはいかない。暴走しているも、アレは生身の大神さんだ。

「はあっ！！」

狼男が攻撃範囲内に入った瞬間、オレは『言乃刃』を薙いだ。いくら鋭い牙と爪を持っているとはいえ、届かなければ意味がない。

しかし、なんの手応えもなく『言乃刃』は虚空を斬る。

そこに、狼男の姿はなかった。

「チルチル後ろ！」

ミチルが叫ぶ。

身体を捻るように振り返ると、目の前には黒く光る爪が迫っていた。

「ミチルくんキイツクッ！！」

言葉通りにミチルが放った上段の蹴りが狼男の腕を横に弾き、オレの顔面を狙った殺意は頬を掠めて通り過ぎる。

「ふっ！！」

そのまま身体の反転の勢いを利用して、オレも仕返しのように狼男の顔面を『言乃刃』で振り上げる。

しかし今度も、ビュンという風を切る音だけが響いた。

バックステップによる跳躍。そして着地。その距離、十数メートル。

そんな離れたところに、狼男はあっという間に移動していた。

「なんつー脚力だよ……」

頬を流れる血を拭って、いっそ感心するようにオレが呟き、

「まったくだよ。もし後ろ走り幅跳びがあれば、楽勝で金メダルだね」

と、ミチルが返した。

……失敗、一つ追加だ。

『現実世界の肉体がベースである以上、身体能力もそれに付随するレベル』

なら、元々のレベルが高ければ？

大神さんの高い身体能力に強過ぎる狼の力が合わさって、そのスピードと機動力は常人の域を余裕で超えている。

だけど、当たりはしなかったが狼男は明らかに『言乃刃』を避けた。

“宣言”が 言葉が通じるかどうか心配だったが、そこは大丈夫みたいだ。

『言乃刃』は暗示の刃だ。言葉が通じなければ意味がない。だが

避けたということは、狼男にも見えている　効くということだ。

「とりあえず少しずつでもダメージを　」

そう言い終える直前、狼男の真横の木が軋みながら倒れた。そしてその衝撃によって巻き上げられる土煙。

ここで初めて、オレは最初の倒木の理由が分かった。

さつきも今も、狼男が爪で幹を抉るように切り裂いたからだ。

パワーとスピードを兼ね備えた戦闘特化型。

これは、一撃もまともに食らうわけにはいかねえな。気を引き締め直し、もう一度頬の血を拭う。

当たり前のように傷自体はもうないし、あまりに鋭い攻撃だったから痛みも感じない。

「来るよ、チルチル！」

ミチルの言葉を合図にしたかのように、狼男が土煙の中から飛び出した。

衝動のままに、ただ一直線に、オレたちという獲物に向かって。と、思ったのが五つ目の失敗だった。

直後、狼男は真横に跳ねた。

オレも瞬時に目で追いかけるが、その姿を捕らえられたのは最初の一瞬だけ。乱立する木々に遮られ、狼男を完全に見失った。

……くそつ、場所が悪い。

山は狼の猟場だ。人間の領域じゃない。

その中で、かすかに狼男が駆ける音だけが聞こえる。

オレとミチルは背中合わせで目を凝らす。

どこだ？　どこから来る？

たとえ異常な回復力を持っている今のオレでも、狼男の攻撃力の前ではあまりに無力だ。

簡単に、致命傷になる。

だからオレたちは瞬きもせず、周囲に集中する。

狼男は、どこから仕掛けてくる？

ちょうどそのとき、夜の闇が一段と暗くなった。

ちらりと空を見る。雲が月を隠していた。

だから暗さに慣れるために一瞬　ほんの一瞬だけ目を閉じた。
刹那、オレは背中をミチルに押し飛ばされた。

「……っ!？」

数歩よろめいてから、慌てて振り返る。

そこには凄惨で、絶望的な光景があった。

狼男に喉笛を噛み付かれている自分と全く同じ姿のミチルが、そこにはいた。まるで数秒後の自分の姿のように。

「ゴメン。ちよつと休憩するわ」

息も絶え絶えにそう言い残し、黒い水のように崩れ落ちてオレの足元の影に戻るミチル。

対して、口にした獲物を失って標的を変える狼男。

その殺気に満ち溢れてた目が、オレを射抜く。

とつさに『言乃刃』を構える。ただし、攻撃のためにじゃなく防御のために。

次の瞬間、オレの身体は長い腕と爪に弾き飛ばされ、直後ろの木に打ち付けられた。

「うっ!」

その衝撃による、肺が潰れるような鈍い痛み。口から全ての空気が漏れたが、新しい空気を吸うことができない。

続いて、腕に走る鋭い痛み。学ランの袖とともに皮膚と肉が深く裂けている。

「ただ、今はそんなことはどうでもイイ。

痛みのせいで落としまった視線を前に向ける。

すでに、オレの喉笛を狙った狼男の爪が目前に迫っていた。

「っ!」

オレの身体が反射的な回避をする　いや、しようとした。

全身の痛みで、身体が一瞬動かない。

「間に合わねえっ!」

そして黒い凶器が　暴走する狂気が、深々と突き刺さった。

……。

……しかし、それはオレの身体にはなかった。

狼男は自分の爪で、自分の胸を突き刺さしていた。

「……怖い、思いをさせ、て……本当、にすまなかった」

自分の爪を突き立てたまま、狼男はそう言った。

「……大神、さん？」

何が起きたのか分からないまま、オレは呟いた。

「月が陰った……おかげ、かな。なんとか、身体を取り戻せたよ」

獠猛な牙を見せながら、ニコリと笑う大神さん。

その胸の傷口からは、血を滲み出てきている。

「……何、してるんですか？」

口から自然と疑問がこぼれる。そしてやっと頭が状況を理解する
と、

「何してんだよ!!」

思わず怒鳴った。

驚きや心配でなく、真っ先に怒りが込み上げた。それが大神さん
に対してか、自分自身に対してかは、分からない。

「……いいんだ。僕はこれでいいんだ」

そう言って、彼はその場に崩れた。

「これなら、僕は誰も傷付けずに済む」

地面に倒れる直前、力なく笑った。

「違う！ そんなの、絶対違う！」

「………そんなの、ただの自己満足だ。」

「はは。泣いているのかい、薄原くん？」

「そんなことはいいいから、もう喋らないで！ なんて なんてこ
んなことになってんだよ？」

これじゃまるで、あの映画の結末と同じじゃないか。

くそつ、オレはまた救えないのか？

また助けられないのか？

……誰か、助けて。

誰でもいいから、誰か。
誰か、誰か、誰か……。

「早く助けに来いよ、ヴィアン!!」

天高く輝く月に、オレは狼の如く吠えた。

終

「男はね、時として狼になるべきなんだよ。飼い慣らされた犬になんか、成り下がっちゃダメなんだ。ちなみにこれも、僕の経験上の話だけどね。だからチルチルくんも気を付けなよ。ワイルドな一面もたまには見せないと、あつという間に真実ちゃんに愛想尽かされるからね」

昨日の夜の出来事が頭から離れず、今朝はいつもより早く起きた。正直、よく寝れなかった。

だからいつもと違って先に身支度を整え、ヴィアンを正拳突きで起こし、朝飯を食べ、いつもより断然早く家を出た。

学校に向かう途中、オレはこのあいだの映画のことを思い出した。何故、あの映画がつまらなかったのかを考えてみた。

……多分、エンディングが問題だったんだ。

多くの人を傷付けてしまった主人公の狼男は、最後には愛する人を守るため、自らを傷付け命を絶った。

そんな自己犠牲という名の自己満足が、どうしても気に入らなかったんだ。他人だろうと自分だろうと、誰かが傷付いた時点でハッピーエンドには決してならないのに。

だから今回の対戦の結末も、オレには後悔と不満しか残っていない。

……………。
「おはよう、薄原くん」

校門の前で、とても朝一とは思えない爽やかな挨拶と、堂々とした仁王立ちで彼はオレを出迎えた。

「……………おはようございます、大神さん」

ローテンションながらも、オレも挨拶を返す。

「いやあ、昨晚は本当にお世話になったね。大恩と言っても過言ではない。むしろ、そう言うべきだな。だから、いの一に君にお礼が言いたくて、こうしてここで登校してくるのを待ってたんだ」
「待ってた、って一体いつからですか？」

「そうだな、薄原くんの登校時間が分からなかったから……三時間ほど前かな」

「三時間！？ そんなにここにいたんですか？」

「つか、三時間前はまだ学校開いてないし。」

「なに、大した時間ではない。諺にもあるだろう、椅子の上にも三年、と」

「……椅子？」

「む。すまない、冗談だ。そのつもりだったんだが、分かりにくかったかな？」

「あ、いや、大神さんがそういうキャラだとは思わなくて……」

突然ボケられても、どうツッコむべきか困る。

「つか、椅子の上にも三年、って思いつき楽しんでんじゃん。」

「いや、僕もそう見られていないのは重々承知の上だ。だけどこれからは、そういう自分も出していこうと思ってるね」

「……再発防止、のためですか？」

自分を必要以上に抑圧しないことが、狼男の再発防止策。

それが、専門家“もどき”の出した案だった。

「まあ、結果的にはそういうことになるが、純粹に僕が楽しいというのも十二分にある。なので改めて言わせてもらおう」

ここで大神さんは、わざとらしく咳払いを一つ。

「諺にもあるだろう、マッサージチェアの上にも三年、と」

「それはもう楽っつか墮落です！ 逆に身体悪くしそうだし！」

「そしてその後、車椅子の上にも三年」

「ほら、やっぱり身体悪くした！」

「しかし実は、オムライスの上にも三年」

「ケチャップの話だったの！？ ついか、確実に腐ってるし！」

……………
小休止。息切れ、ネタ切れ。

「……ははっ、ははははは」

とても爽やかに、大神さんは笑い出した。

「ヴィアンさんの言う通りだ。実に君はボケ応えのある相手だ」

「……あの野郎、余計なコト吹き込みやがって」

ただ黙って治療もできねえのか、あの吸血鬼“もどき”は？

……………。

「……そういえば、身体の調子どうですか？ 痛みとかありませんか？」

「大丈夫だ、心遣いの方が痛み入るよ。傷口も全く残ってないし、体調もむしろ良いくらいだ。おかげで今朝は随分と早く目覚めてしまった。さすがは『吸血鬼の血』と言ったところかな。ただ」

「ただ？」

「ヴィアンさんが言うには血の影響、副作用。しばらくの間、狼の力は完全に消えないそうだ」

そう言っただ大神さんは、自分の手の平を力強く握っては開く動きを二度繰り返した。

「だが、慣れてしまえば逆に便利で有用な力だよ。瓶の蓋が開かなくて困ることもない」

いっそ瓶ごと破碎できる程さ。

と、大神さんは明るく笑い放った。

「とまあ、こんな僕だけど、良ければこれからもよろしくお願いしたい」

グーとパーを繰り返していた手を、パーの状態でおれに向けて差し出す大神さん。

つまりは、握手だ。

だけどおれは、それに応えるのを躊躇った。

今は人間の形をしているが、それは間違いなく昨日おれを殺そうとした手だったからだ。

そんなオレを察してか、大神さんはそのままの体勢で、
「安心してくれ、薄原くん。ここで待つてる間、ずっと力加減の練習をしていたから」

と、少し方向性の違うフォローを入れた。
そしてさらに続けて、一言付け加えた。

「ようやく十回中七回は成功するようになったところだ」

果たしてこれが大神さんのポケなのか。オレはそれにツッコんだのか。そして何より、ちゃんと握手を交わしたのか。それは皆さんの想像にお任せしたいと思う。

第三話「vs・おぼれるマーメイド」に続く。

***終* (後書き)**

以上、もどきども第二話「vs. ろんずるウルフマン」でした。

色々と批判・批評・訂正点があるとは思いますが、それを感想の方に書いて頂けると、作者は泣いて喜びます。

詳しいあとがきのモノは活動報告に書き込むつもりなので、よろしければそちらも是非。

では、ここまで読んでくださった方々に最大級の感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202/>

もどきども 第二話「vs.ろんずるウルフマン」

2011年10月4日03時36分発行